

戦時下（昭和十二年（十九年））に刊行された「日本文化」
（文学、宗教、国学、思想、歴史等）に関する論集を全冊復刻。

日本文化

全10巻

第一冊（昭和十二年七月）
第九十七冊（昭和十九年十二月）
解説 井上 順孝

クレス出版

「日本文化」刊行の言葉

井上順孝

雑誌「日本文化」の第一号は昭和十二（一九三七）年七月に刊行されている。当初は月二冊の刊行であったが、十四年から月一冊になっている。ここに収められた最終号の九十七冊は昭和十九年十二月刊行である。まさに戦時下における「日本文化」についての議論が集められているのである。

内容はかなり多岐にわたっている。文学、武道、神道、仏教、国学、日本思想、歴史、建築に関わるテーマ、さらには科学がどう国家に貢献すべきかといったテーマもある。戦争が始まると、「大東亜戦争の意義」についての主張も目だってくる。そして民族精神、日本精神といった言葉が頻繁に登場する。やや珍しいところでは、イスラーム問題、ユダヤ問題、フリーメイソン問題も扱われている。

直接執筆されたものの他、講演録、また他の書からの転載もある。そこで登場する研究者の幅も広い。飯島忠夫、伊東忠太、宇野円空、折口信夫、金子大栄、紀平正美、河野省三、椎尾弁匡、鈴木大拙、武田祐吉、次田潤、久松潜一、山田孝雄などの名がある。戦後も活躍した研究者等が多く含まれている。それぞれの研究者の戦前戦後を通しての思想的展開を追う上でも、なかなか興味深い資料と言うことができる。

雑誌刊行の時代背景を見るなら、昭和十二年七月二十一日に教学局官制が公布されている。文部省思想局を拡大再編して文部省教学局が設置されたのであるが、この雑誌の刊行はこれに呼応したものであると理解できる。発行母体は日本文化協会であるが、日本文化協会が国民精神文化研究所の協力機関として発足したのは、昭和九年二月十一日である。現在の建国記念の日、戦前の紀元節に当たる日に発足したことが象徴するように、日本文化の称揚が大きな目的であったと推察される。

時代が時代であるから、日本文化についての自由な議論ができるわけではなかった。かなり抽象的でつかみどころのない思想研究、精神論などもある。学問の自由と国家への貢献との矛盾が生じることについての奥歯にはさまったような物言いもある。他方で明確に戦時体制下におけるいわば国民の義務とでもいうようなものを主張したものもある。当時の風潮にそっくり乗ったような記述もあれば、本当に言いたいことがどこまで許されるかを意識した上での妥協の産物のような記述もあることである。

戦争が激化する頃に書かれたものの中には、ドイツにおけるユダヤ人排斥を是認するような講演がある。この時代は学問的な議論も、愛国主義的な色彩を強める社会全体の傾向から自由ではありえなかった。それはしかし、過去の問題であろうか。昨今の論壇にもこの雑誌に収められた論と大同小異のものが見受けられる。必ずしもすべて乗り越えられた問題ではない。その意味で、こうした時代に知識人たちがどのような主張を繰り広げたかを、じっくりと確認する必要がある。

日本文化 全10巻収録一覧

第1巻 第一冊〜第十二冊（昭和十二年七月〜十二月） 行としての科学（第一冊、昭和十二年七月） 宮本武蔵 五輪書と剣道の精神（第二冊、昭和十二年七月） 史学の意味（第三冊、昭和十二年八月） 独逸の現状とその指導精神（第四冊、昭和十二年八月） 自然科学の領域（第五冊、昭和十二年九月） 支那に於ける抗日運動とコミンテルンの活動（第六冊、昭和十二年九月） 聖徳太子の十七条憲法（第七冊、昭和十二年十月） 近代戦と思想宣伝戦（第八冊、昭和十二年十月） 中臣祇と民族精神（第九冊、昭和十二年十一月） 資源の愛護と非常時財政経済への国民の協力（第十冊、昭和十二年十一月） 炉辺閑想（第十一冊、昭和十二年十二月） 日本精神と自然科学（第十二冊、昭和十二年十二月）	第2巻 第十三冊〜第二十三冊（昭和十三年一月〜六月） 明治以後 詔勅謹解（第十三冊、昭和十三年一月） 国語と国民性（第十四冊、昭和十三年二月） 支那の民情習俗に就いて（第十五冊、昭和十三年二月） 日本の儒教（第十六冊、昭和十三年三月） 道としての教育（第十七冊、昭和十三年三月） 芭蕉と俳諧の精神（第十八冊、昭和十三年四月） 偶然の問題と文学（第十九冊、昭和十三年四月） 我が風土・国民性と文学（第二十冊、昭和十三年五月） 敢語と日本儒教（第二十一冊、昭和十三年五月） 時局下学生児童の暑休を如何にすべきか（第二十二冊、昭和十三年六月） 文化の問題（第二十三冊、昭和十三年六月）	第3巻 第二十四冊〜第三十二冊（昭和十三年七月〜十二月） 欧米に於ける猶太問題の現状並に極東猶太財閥の動向と其の対策（第二十四冊、昭和十三年七月） 天地の大道と親心（第二十五冊、昭和十三年八月） 日蓮と日本の仏教（第二十六冊、昭和十三年八月） 風土記と古代日本（第二十七冊、昭和十三年九月） 徳性としての科学（第二十八冊、昭和十三年十月） 回教に就いて（第二十九冊、昭和十三年十月） 道元と日本の禪（第三十冊、昭和十三年十一月） 財政経済より観たる支那（第三十一冊、昭和十三年十二月） 宮中祭祀の御実際（第三十二冊、昭和十三年十二月）	第4巻 第三十三冊〜第四十冊（昭和十四年一月〜六月） 教育審議会資料（第三十三冊、昭和十四年一月） 戦記物語と日本精神（第三十四冊、昭和十四年二月） 日本の教養と反省（第三十五冊、昭和十四年二月） 自然科学教育の両側面（第三十六冊、昭和十四年三月） 自然科学者の態度（同 右） 政治と教育（第三十七冊、昭和十四年四月） 宗教の領域（第三十八冊、昭和十四年四月） 近代生活に於ける 禅堂の意義（第三十九冊、昭和十四年五月） 時局と産業人（同 右）	第5巻 第四十一冊〜第四十八冊（昭和十四年七月〜十二月） 日本人モラエス（第四十一冊、昭和十四年七月） 幕末勤皇歌人集（第四十二冊、昭和十四年八月） 国学と玉だすき（第四十三冊、昭和十四年九月） 東亜の開発と皇国精神（第四十四冊、昭和十四年九月） 航空機発達の趨勢（同 右） 偉大なる神話（第四十五冊、昭和十四年十月） 楠氏一門の教養（同 右）	第6巻 第四十九冊〜第五十七冊（昭和十五年一月〜六月） 直毘靈——神の道とやまと心（第四十九冊、昭和十五年一月） 日章旗（第五十冊、昭和十五年一月） 創学校啓——国学の建設（第五十一冊、昭和十五年二月） 肇国の精神（第五十二冊、昭和十五年三月） 英仏独の戦時国民生活（第五十三冊、昭和十五年三月） 帝国憲法と臣民の翼賛（第五十四冊、昭和十五年四月） 中等教育ニ関スル教育審議会資料（第五十五冊、昭和十五年五月） 満蒙開拓青少年義勇軍現地事情報告座談会記録（第五十六冊、昭和十五年五月） 日本刀と日本精神（第五十七冊、昭和十五年六月）	橋田 邦彦 岡田 恒輔 田辺 元 孫田 秀春 松井 元興 白井 成允 河野 省三 内閣情報部 奥田 正造 紀平 正美 吉田 熊次 山田 孝雄 内山 完造 飯島 忠夫 橋田 邦彦 志田 義秀 中河 与一 久松 潜一 山口 察常 日本文化協会 長与 善郎 犬塚 惟重 小西 重直 小林 一郎 次田 潤 田辺 元 大久保幸次 紀平 正美 木村増太郎 星野 輝興 高木 武 福島 政雄 田辺 元 橋田 邦彦 広浜 嘉雄 金子 大栄 鈴木 大拙 伍堂 卓雄 武田 祐吉 花野 富蔵 志田 延義 久松 潜一 橋本伝左衛門 和田 小六 紀平 正美 中村 直勝 飯島 忠夫 高木 武 金子 大栄 安藤 正次 松波仁一郎 竹岡 勝也 山田 孝雄 内閣情報部 大串兎代夫 拓 務 省 前田 稔靖
						尾上 八郎 加藤虎之亮 伊東 忠太 滝 精一 加藤 仁平 加藤 玄智 岸田日出刀 丸尾彰三郎 鴻巣 盛広 椎尾 辨匡 広瀬 豊 宇野 哲人 鈴木 大拙 太田 亮 高山 岩男 鳥山 喜一 教 学 局 守隨 憲治 茅野 蕭々 折口 信夫 日本文化協会 伊東 延吉 八木 秀次 日本文化協会 鼓 常良 花野 富蔵 久松 潜一 河野 省三 宇野 円空 吉岡 文六 近藤 寿治 迫水 久常 高山 岩男 海後 宗臣 平井 保喜 木宮 乾峰 田辺 尚雄 阿部 仁三 芳賀幸四郎 西堀 一三 和辻 春樹 池田 雪雄 佐竹 大通 名和 力三



第7巻 第五十八冊〜第六十三冊（昭和十五年七月〜十二月） 日本書道と日本精神（第五十八冊、昭和十五年七月） 弘道館記と其の述義（第五十九冊、昭和十五年八月） 日本建築の美（第六十冊、昭和十五年八月） 日本美術の特性（同 右） 菅家遺誠——和魂漢才——（第六十一冊、昭和十五年九月） 太神宮参詣記と敬神尊皇（第六十二冊、昭和十五年十月） 日本建築の特性（第六十三冊、昭和十五年十一月）	第8巻 第六十四冊〜第七十四冊（昭和十六年一月〜十二月） 大仏師運慶（第六十四冊、昭和十六年一月） 万葉精神（第六十五冊、昭和十六年二月） 法然と日本文化（第六十六冊、昭和十六年三月） 吉田松陰 講孟余話（第六十七冊、昭和十六年四月） 王道に就いて（第六十八冊、昭和十六年五月） 禅経験の研究に就て（同 右） 新撰姓氏録と上代氏族史（第六十九冊、昭和十六年六月） 我が国土と文化的精神（第七十冊、昭和十六年七月） 支那民族性論（同 右） 臣民の道（第七十一冊、昭和十六年九月） 日本の演劇（第七十二冊、昭和十六年十月） 日本の詩と音楽（同 右） 橋曙寛評伝（第七十三冊、昭和十六年十一月） 教育審議会資料（第七十四冊、昭和十六年十二月）	第9巻 第七十五冊〜第八十四冊（昭和十七年一月〜十二月） 国民学校の精神に就いて（第七十五冊、昭和十七年一月） 発明発見と科学教育（第七十六冊、昭和十七年二月） 教育審議会資料（第七十七冊、昭和十七年四月） 日本文化と自然（第七十八冊、昭和十七年五月） 比島の志士ホセ・リサル（第七十九冊、昭和十七年六月） 玉勝間と初山踏（第八十冊、昭和十七年七月） やまとごころ——大國隆正の思想——（第八十一冊、昭和十七年八月） 大東亜の民族と文化（第八十二冊、昭和十七年九月） 南方を巡りて（第八十三冊、昭和十七年十月） 思想国防の本義（第八十四冊、昭和十七年十二月） 大東亜共栄圏建設の構想（同 右）	第10巻 第八十五冊〜第九十七冊（昭和十八年一月〜十二月） 「国際秘密力とフリー・メーションリー」解説（第八十五冊、昭和十八年一月） 思想戦と総力戦（第八十六冊、昭和十八年二月） 大東亜戦争と教育（第八十七冊、昭和十八年三月） 朗詠の歴史と短歌朗詠法（第八十八冊、昭和十八年四月） 国家と哲学（第八十九冊、昭和十八年五月） 大東亜と音楽（第九十冊、昭和十八年六月） 家塾教育の精神（第九十一冊、昭和十八年七月） 近世初頭における一町人の性格（第九十二冊、昭和十八年八月） 日本の教養の伝統について（第九十三冊、昭和十八年九月） 国防と海運（第九十四冊、昭和十八年十月） 享保の治と現代（第九十五冊、昭和十八年十一月） 宣長の「物のあはれ」の説と古道との関係に就て（同 右） 荘内藩の徳業を語る（第九十六冊、昭和十八年十二月） わが母（第九十七冊、昭和十九年十二月）	尾上 八郎 加藤虎之亮 伊東 忠太 滝 精一 加藤 仁平 加藤 玄智 岸田日出刀 丸尾彰三郎 鴻巣 盛広 椎尾 辨匡 広瀬 豊 宇野 哲人 鈴木 大拙 太田 亮 高山 岩男 鳥山 喜一 教 学 局 守隨 憲治 茅野 蕭々 折口 信夫 日本文化協会 伊東 延吉 八木 秀次 日本文化協会 鼓 常良 花野 富蔵 久松 潜一 河野 省三 宇野 円空 吉岡 文六 近藤 寿治 迫水 久常 高山 岩男 海後 宗臣 平井 保喜 木宮 乾峰 田辺 尚雄 阿部 仁三 芳賀幸四郎 西堀 一三 和辻 春樹 池田 雪雄 佐竹 大通 名和 力三
				国際政経学会調査部

道元と日本の禪 紀 平 正 美

一日蓮の四句偈

念佛無間。禪天魔。眞言亡國。律國賊。

道元、親鸞、日蓮の三偉人によつて、宗教の極致が現成し、完全に宗教が止揚(Aufhebung)的のものとなされた。今少しく此の事を明かにする爲に、宗教のもつ意義から説明を始は如何なる處に成立するかと云へば、我他の對照の上に、我として據るべき或者への反がある。而て其の或者(或は中心といふのが適當であらう)には、最も直接なる身體よたる立場々々に従うて、無數の種類或は階段がある。而て此の經過の間に其の「我」が無力なりと表象せられた時に、その據り得る所のものと合一して、其の無力を回復に宗教と云はるる所のものである。據り得るとなされた所のものに據り憑らんとするづけられる一意識作用である。其故に其れは又一般に自己意識には缺くべからざる處に據る様なものである。其故に又如何なる原始状態にあつても、人は宗教的であると云

橘曙覧評傳

一 晩年の作物

折 口 信 夫

天皇は 神にしますぞ。天皇の勅(オノミツ)といはゞ、畏みまつれ

天の下清くはらひて、上古の御まつりごとに復る よろこべ

橘ノ曙覧が、越前福井三橋の志濃夫廼舎で、五十七年の生涯を終へたのは、慶應四年八月二十八日であつた。

「此日、早且自ら起たざるを知り、一二、後事を遺命し、且つ、如斯(カ)古來未曾有の大御代に遭ひながら、眼前、復古の盛儀大典を見奉るに至らず、沉や、かねての抱負も將に達するに向はぬとして、今日はかなく世を去ること、返すも口惜しけれとて、切齒瞑目せられたり。聞く人、其志のほどを悲しまざる者なかりき」と、臨終の様を追懷したのは、彼の長男井出今滋である。(明治卅六年作、橘曙覧小傳)

この英雄風な最期の記述せられてゐる日は、京都では、既に東京行幸の爲の訓諭が出るまでに、新代の光りが照りわたつてゐた。

國學と玉だすき

久 松 潛 一

序

近世に於ける國學はその時代の日本的自覺の學問的成果として最も注目されるのであるが、平田篤胤の玉だすきは、近世國學の精神を理解した國學の傳統を明らかにするために極めて重要な著書である。その意味で玉だすきを中心として國學の意義とその傳統とを理解して見たいのである。はじめに國學の意義とその展開とを概観し、また平田篤胤の國學について觀察し、次に玉だすきの成立と組織とをのべ、更に玉だすきに於ける國史觀や國學史觀を解説して見たいのである。

一 國學の意義

國學は本來國の學であり、日本に關する學問であるが、これにも歴史的に見て三の意味が考へられるのである。第一は大寶令に見える如く、古代に於て中央に大學を設け、地方に國學を設けたといふ場合の國學である。この場合の

大東亞戰爭と教育 海 後 宗

一 新秩序建設と教育

大東亞の諸地域に於いては大御後威の下に皇軍將士の華々しい進撃が展開され、世界ない大戦果を擧げて來てゐる。かくのごとき廣大な諸地域にわたつた進撃は、大東亞の米英永年の支配より解放せられた東亞人に潑刺たる建設生活を展開せしめんとするための進撃しつゝある諸地域の東亞人は永年にわたる米英の桎梏下にあつて、民族自らの生活してゐたのである。今日我々の力によつてこれらの民族に自らの生活を持たしめないな惱を背負はねばならなかつたことであらう。かゝる危機に於いて米英の支配を一掃し、に入らしめんとするために、大進撃の御戦が展開されてゐるのである。全大東亞人をしてその下に諸民族の新しい建設生活を力強く展開せしめることこそ、實に大東亞戰爭の歸

日本文化 全10巻 日本文化協会 発行

井上順孝 解説 A5判／上製クロス装

■ 第一回配本 全7巻 第一冊～第六十三冊（昭和12年7月～昭和15年11月）

揃定価95,000円（税別） 平成21年5月末日刊行

ISBN978-4-87733-488-8（セット）

■ 第二回配本 全3巻 第六十四冊～第九十七冊

（昭和16年1月～昭和18年12月、昭和19年12月）

揃定価50,000円（税別） 平成21年8月末日刊行

ISBN978-4-87733-489-5（セット）

国学和学研究資料集成 全八巻

中澤伸弘、鈴木 亮 共編・解説

第一巻 増補 三哲小伝、古学道統図、近世歌人略系、古学小伝

第二巻 国学の研究

第三巻 国学史の研究

第四巻 国語学史の研究

第五巻 近世国文学之研究、駿河古学小史

第六巻 浪華の歌人、近世文芸復興の精神

第七巻 近世に於ける神祇思想、神道思想とその研究者たち

第八巻 倭学戴恩日記、歌人書簡集、名家書翰集抄

揃定価95,000円（税別） ISBN978-4-87733-430-7（セット）

近世和歌研究書要集 全八巻

中澤伸弘、宮崎和廣、鈴木 亮 編・解説

第一巻 近世和歌史

第二巻 徳川時代和歌の研究

第三巻 幕末の歌人、幕末歌壇の研究

第四巻 近世和歌の新研究、近世女流歌人の研究

第五巻 文学遺跡巡礼 抄（一）

第六巻 文学遺跡巡礼 抄（二）

第七巻 続々歌集解題餘談 巻、式

第八巻 近世和歌書誌刪補、類題和歌集私記

揃定価95,000円（税別） ISBN4-87733-301-0（セット）

日本民俗選集 第一回全7巻 小川 直之 編・解説

第1巻 日本民俗学論考（中山太郎著）、史譚と民俗（本山桂川著）

定価13,000円（税別） ISBN978-4-87733-463-5

第2巻 民俗断篇（西村真次著）、民俗と建築（今和次郎著）

定価13,000円（税別） ISBN978-4-87733-464-2

第3巻 島国の唄と踊（田辺尚雄著）、絵文字及源始文字（田崎仁義著）

定価13,000円（税別） ISBN978-4-87733-465-9

第4巻 信仰と迷信（富士川游著）、民俗怪異篇（磯清著）

定価11,000円（税別） ISBN978-4-87733-466-6

第5巻 満洲・支那の習俗（永尾龍造著）、東北の土俗（日本放送協会東北支部編）

定価14,000円（税別） ISBN978-4-87733-467-3

第6巻 江戸情調（笹川種郎著）、かくれさと雑考（上林豊明著）

定価14,000円（税別） ISBN978-4-87733-468-0

第7巻 年中行事（北野博美著）

定価11,000円（税別） ISBN978-4-87733-469-7

揃定価89,000円（税別） ISBN978-4-87733-470-3